読売 歌壇

小池　光　選

大びらきしたる車窓に顔を出し弁当三つと叫びたりし日　東京都　野上　卓

【評】こういう日が確かにあった。いまは電車の窓は開かず、ホームに駅弁売りの影もない。暖冷房はすばらしいけれど。開けた窓から「弁当三つ」と絶叫。楽しかった汽車の旅。

夫には聞かれぬやうにこそこそと二人の娘らの恋話聞く　横浜市　古山　智子

【評】娘たちが大きくなって、女同士の会話というものが生まれる。お父さんには聞かせたくないひそひそ話。だんだんお父さんはひとり孤独になってゆくが、それも人生。

冬となる日差しの午後に綿虫は杖つく吾にまつわり飛べる　八王子市　斎賀　勇

【評】もの静かな歌だけど、情景が見えるよう。「杖つく吾に」が眼目で、ここでしっかり歌になった。

秋晴れの塗装工事の足場にはカーソルのごと人動きけり　出雲市　原　紀和子

「まだ短歌やっていますか」と医師はきくエム・アール・アイの頭脳像を見て　小美玉市　松山　光

祖父のこと我は知らぬが吾は祖父に瓜二つだと父は言うなり　羽曳野市　鎌田　武

あの人が上がってくるよな予感してエレベーターの開くドア待つ　名古屋市　徳広　光恵

ホームから飛び降り引き摺り押し上げて助くる人等に拍手のおこる　あきる野市　大西　国子

とりとめし命を喜ぶ日が過ぎて父に泣かさるる日が始まりぬ　佐世保市　近藤　福代

ガザ地区の冬を思へり皓々とイルミネーションともる街角　足利市　熊田　敏夫

栗木　京子　選

友もまた回転ドアは苦手だと長縄跳びの昔へ跳んだ　朝霞市　橋本　友子

【評】回転ドアと長縄跳び。タイミングに合わせてうまく入るのは難しい。一瞬の迷いが流れを遮ってしまう。過去を思い出したことを「昔へ跳んだ」と表した結句が秀逸。

乗客は吾のみのバス折り紙のサンタが運転席に揺れおり　小野市　大野多恵子

【評】バスの運転手の家族が作ったサンタクロースかもしれない。ぬいぐるみでなく折り紙であるところが味わい深い。ひっそりとした車内に明るさをもたらすサンタである。

アプリでねポイントたまるもういいよ普通に買うよ普通に払う　明石市　港　由美子

【評】スマホにアプリを入れてポイントをためればお得です。そう言われるが使いこなせない。「普通に」の繰り返しに重みがある。

政治家の脱税よりも滞納は少しはましと思うこのごろ　長野市　宮崎　雄

落語家の講演に手話通訳者くすぐりさへも生真面目に伝ふ　鴻巣市　渡辺　照夫

瀞八丁三県交わる位置に立ち見上ぐる大空果てなくひとつ　宇陀市　大畑美千代

出版を生業にする友のいて誰もが河野裕子を知れり　茅野市　三好　碧

ハワイから届きしフラの動画見て手足ほぐれる晩秋の朝　大阪市　吉田　成美

切るを決めみごとな黄葉見上げゐる我とブナの木庭師は撮りぬ　鳥取県　小谷真由美

霧の立つゴルフ場へと風吹けば舞台が開きさあナイスショット　太田市　竹中　栄一

俳　万智　選

あやとりはやっぱ赤色ジグザグの東京タワー建てて壊して　豊中市　葉村　直

【評】やっぱ赤色という勢いのある断言に、下の句で大いに納得させられる。糸のやりとりの過程を、東京タワーに合わせて建築と破壊で表現した結句が楽しい。

脱毛のわれに帽子を選びゐる子は楽しげにラメ入りを指す　熊谷市　林　邦子

【評】楽し気な表情も、派手なラメ入りを選ぶのも、子どもなりの励ましなのだろう。描写だけで成り立つ一首だが、親子の互いの心情が伝わってくる。

言葉より深く心を通わせた犬の姿の家族であった　春日部市　宮代　康志

【評】「家族のような犬」「犬は家族」といった言い方よりも一歩踏みこんだ表現だ。散文的な結句に、しみじみした迫力が宿った。

古本屋のおじさん奥に居たんだね静かな夜の港のようだ　船橋市　鳥畑　泉

湯豆腐をあなたと食べて冬のことあたたかいって思ってたっけ　前橋市　ナカムラロボ

きみという書物のなかのぼくという付箋も栞も縁なきページ　富士見市　松本　尚樹

舗道にて片寄る竜の背のような落葉の上をそろりと行きぬ　柏　市　塩田　淳文

我が娘との二十歳の記念の登山です美穂の『穂』の字の穂高を目指す　守谷市　久保田洋二

交番にお巡りさんが居ない夜もファミリーマートにファンさんは居る　金沢市　竹内　一二

トンネルの向こうに明かりが点くようにゴミ出しをして今日をはじめる　東京都　大王グループ

黒瀬　珂瀾　選

今年から次の年へと渡される灯はたてがみのように前向く　和歌山市　桜庭　紀子

【評】いよいよ歳晩、来年は良い年になるようにとの祈りも高まる。だが、どんな一年になろうとも前向きに生きていきたいものだ。干支である辰の凜々しいたてがみのように。

隠岐島の短歌大会で知り合ひし友より手編みの帽子が届く　札幌市　藤林　正則

【評】人と人を結びつけることは、短歌や文芸のひとつの力。歌を知らなければ出会わなかった人とのつながりが、また歌を生む。

十二月八日は雪が降ってゐた開戦日の昭和語らずに老ゆ　新潟市　渋谷まこと

【評】戦争の記憶に触れるたび、それを語り継いでこなかった自分の心を思う。そこにはつらい体験があるのだろう。戦争とは、多くの人を長年にわたり苦しめる罪悪なのだ。

その朝に独りで巻きしやゲートルのほつれかなしき学徒の行進　大和郡山市　四方　護

三島の死おもへば今も赫奕と大き夕日はわが裡に墜つ　稲城市　山口　佳紀

人類の進歩と調和ほがらかに謳いし万博いまは幻灯　阪南市　岡本　文子

すこしずつ白髪増えゆくわが頭素直に認め生きゆかんとす　富山市　さいとうてるみ

半世紀野草食いつつ拓きたる五町五反はわれのまほろば　福島県　黒沢　正行

電柱の西陽の長き影に添ひ杖の歩みのゆれを直しゆく　茨城県　冨永　道子

閉じられし母校が再び我を迎うシニア大学一期生として　印西市　塩田　幸子

次回は1月8日（月）掲載予定

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから。右の影絵はとしこしそば